

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370767

研究課題名(和文)「国風文化」期における海外文化受容構造の研究

研究課題名(英文) A Study on the Receptive Structure of the Foreign Culture in the Heian nationalism era

研究代表者

佐藤 全敏 (SATO, Masatoshi)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：20313182

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：10～11世紀の貴族たちが愛好していた中国文化は、同時代のものではなく、すでに滅んでいた唐代の文化であった。これは「十二単」「かさね色目」をはじめ、様々な事例から証される。これと並行して9世紀末以降、倭の世俗のなかにも「文化」を発見するようになり、これも愛好するようになっていく。国風文化とは、古い唐代文化の懐古的維持と倭文化の発見という二つの柱をもつものであり、それらが並存・融合したものであった。

研究成果の概要(英文)：The Chinese culture for which the Japanese aristocracy had great liking in the 10th and 11th centuries was not, as one might rationally assume, the contemporary one but that of the age of T'ang dynasty, which had already perished at the beginning of the 10th century (907). There is a set of evidence of the T'ang characteristics found in the Japanese aristocratic culture in the period concerned. Alongside this tendency, the Japanese nobles began to find "culture" in their vulgar customs of indigenous Yamato, becoming fond of its taste after the end of the 9th century. Thus, the culture of the Heian nationalism in the 10th and 11th century was propped by the two pillars: the preservation of the culture of the T'ang dynasty and the discovery of Yamato Culture, both of which could be either paralleled or mingled.

研究分野：日本古代史

キーワード：国風文化 宇多天皇 御記 蔵人 観心寺如意輪観音像 女房装束 かさね色目

1. 研究開始当初の背景

(1) 1990年代以降、「国風文化」は本当に「国風(日本風)」だったのか、そもそも「国風」という枠組み自体に欺瞞性はないのか、といった厳しい問い直しが行われている。

その背景には、第一に、遣唐使の停止以後のほうが国際交通・交流・交易が活発になったという実証的研究の進展、第二に、「国民国家批判」の強いインパクトにより、「国風文化」概念も国民国家成立期の一種のイデオロギーであったと捉えられるようになったこと、の2点がある。

その結果、現在では、「国風文化」とは「中国文化の骨組みを残したまま日本で大衆化したもの」「唐風文化が洗練・一般化して浸透したもの」とする理解が有力となりつつあり、またそうした理解が近接諸分野(美術史・宗教史・日本文学史など)にも影響を与えるようになってきている(たとえば2007年京都国立博物館『藤原道長』展の図録など)。

ただしこうした理解には、すでに一定の疑念も呈されている(東野治之『遣唐使』2007年)。

(2) 研究代表者は2008年に『平安時代の天皇と官僚制』を公刊し、9世紀末から10世紀初頭にかけて、天皇の食事体系が唐風のものから離脱していくことを明らかにした。また古代日本の官僚制を考察し、やはり9世紀末から10世紀初頭にかけて、唐を規範とする国家体制への志向性が衰退していったと考えられることを述べた。

こうした検討結果をふまえ、同書終章において、「いかに唐物が流通し、いかに経済交流が活発になろうとも、もはや理念としての唐を絶対的規範とすることがなくなった」と論じた。唐の国制・文化への摂取の態度が、9世紀末から10世紀初頭にかけて根本的に転換した、と論じたのである。これは1990年代以降の「国風文化」論に、再検討の余地があることを示そうとするものでもあった。

幸いこうした理解に賛意をよせる日本史分野・美術史分野の研究も現れている(上島享『日本中世社会の形成と王権』2010年、皿井舞『日宋交流と彫刻様式の転換』2011年など)。

2. 研究の目的

(1) 以上の拙論において提唱した「国風文化論」についての捉え方は、現状ではなお旧態然とした、国家の枠組みにとらわれた議論ともみえかねない。また、こうした課題は、単に文化史の次元にとどまらず、「日本風」(「国風」)というものをどのように理解するのか、という問題と直接的に結びついている。

本研究は、1990年代以降のすぐれた研究を十分に咀嚼したうえで、あらためて「国風文化」と呼ばれてきた文化現象の内実を明らかにしようとするものである。そのために本研

究では、当該期の「文化受容の構造」なるものに着目し、これを明らかにする。その際、観念的な議論とならぬよう、個別実証研究の総合という方法をとる。

3. 研究の方法

「国風文化」の特質を明らかにするため、その文化の前提となっている海外文化との関係性に注目し、その「摂取の論理」「受容の構造」を明らかにしようとする。具体的には、まずは以下の素材を考察して、そこに共通する論理を読み取ることを基盤にすえる。その後、関係事象を検討し、演繹化と総合化をはかる。

(1) 「女房装束」と「重ね色目」

10世紀以降、貴族社会の女性の正装とされた女房装束(いわゆる「十二単」)は、これまで有職故実ないし服飾史分野の研究対象とされてきた。だが予備考察によれば、そこで重ねられている衣服の種類、重ねる順序などには、中国の衣服と日本の衣服に対する意識構造が如実に表されているようである。本研究では、まずはこうした女房装束の構造を歴史的な観点から分析する。また、そこにみられる「重ね色目」についても歴史的な観点から検討する。

(2) 「宇多天皇日記」の文体

和歌の興隆や各種年中行事の「国風」化を強力に押し進めたのは宇多天皇であったとされる。「古今和歌集」の成立も彼を起点とし、食事体系の変化も彼の時代に始まっていた。その一方、宇多天皇は中国の政治文化を是とする菅原道真を重用し、漢詩文も愛した。矛盾しているようにみえる彼のなかで、「中国的」なものと「日本的」なものはどのように認識され、関係づけられていたのか。そこには「国風文化」が立ち上がる際の論理が隠されているはずである。だが、これを直接説明する彼の言葉は残されていない。そこで本研究では、「宇多天皇日記」の文体を国語学的手法を借りて分析する(峰岸明『変体漢文』1986年、小山登久『平安時代公家日記の国語学的研究』1996年ほか)。

予備的に考察してみただけでも、彼の日記は、使用漢字・倭語と漢語の使い分け・文法など、諸点においてのちの貴族の日記とは異なっているようにみえる。これは「変体漢文」誕生期の様相なのかどうか。これを実証的に検証し、「国風文化」を先導した人間のなかで漢文・漢語がどのような論理のもとで摂取・利用され、新しい文脈のなかに位置づけ直されていたかを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 女房装束は、上半身にヒトエ・ウチキ・ウワキをつけ、その上に「唐衣」を着し、一

方、下半身はハカマをはいたうえで「裳」を背後につける。早くから指摘されているように、その原型は奈良時代の「衣」「背子」「裾」などに求められ、さらにそれらは唐の女性の一般的な装束に起源をもつ。

そうした奈良時代の唐風の装束と平安時代の女房装束との大きな相違点は、唐風の「裳」が形骸化することにより「衣」がほぼ完全に露出するようになること、また「衣」の内側に重ねていたヒトエ・ウチキや、下半身のハカマまでが露出するようになったことにある。女房装束から「唐衣」と「裳」を取り除けば、その姿は構造的にいて、6世紀以前からみられる、日本の上流階級の女性のインナーウェア姿そのものである。実際、摂関期の女房たちも、日常的には「唐衣」と「裳」をつけずに過ごし、主人の前に出るときにだけ、それらを身につけた（なおそのインナーウェアのあり方も、もともとは大陸の強い影響下で形成されたものであった）。そして摂関期の人々は、「唐衣」を唐の装束と認識していた。

要するに、平安時代の女房装束とは、唐風の公的装束の内側に着ていた、より古い形態を残すインナーウェアが、唐風装束の形骸化によって表側に露出してきた状態と理解できる。そして正規の場面においてのみ「唐衣」と「裳」を着し、唐風を装うのであった。

(2) 女房装束のヒトエとウチキによってつくりだされる「重ね色目」は、文献上、10世紀初頭頃から散見するようになる。その重ね方のバリエーションは様々であるが、基本的には青・赤・白・紫・黄の組み合わせからなっており、それは中国の伝統色である五色の変型したものと判断される（黒が紫に置き換わる）。たとえば『満佐須計装束抄』にみえる「青紅葉」と称される重ね方は、青・黄・赤とその濃淡色の組み合わせでできており、また「紫の薄様」と称される重ね方は、紫・白とその淡色の組み合わせでできている。また「裏山吹」は黄と青のみである。要するに重ね色目とは、重ね方それぞれに日本独特の呼称を付してはいるものの、その実態は、中国の伝統色である五色をいかに組み合わせるかという論理で貴かれており、その組み合わせ方に独自の工夫をこらしたものであった。なお絵画でいうところの具色の概念との関係は今後の課題である。

(3) 装束の分析と関連して、大阪府河内長野市の観心寺に所蔵される如意輪観音像の制作年とその制作背景についての考証も行った。その結果、同像は承和10年(843)前後に、嘉智子太皇太后が、子の仁明天皇の身体安穩を願って制作されたものであるとの結論を得た。なお、この像をめぐっては、その彫刻様式が唐から伝わったものである可能性があること、その制作は官営工房であったこと、承和の遣唐使の帰国との関係を慎重

に吟味する必要があることなど、さらに検討していく必要があることが判明した。

(4) 「宇多天皇日記」の文体を分析したところ、同時代の他の日記とはまったく異なる文体で書かれていることが国語学的に証明された。すなわち宇多天皇は、日々日記を記す際に、当時国内でひろく用いられていた日常実用文である「記録体」を使う意思が希薄であり、そこから離れた中国古典文そのもので書く場合が多かった。その文体は、当時、彼の周囲で書かれていた、唐代文学の影響を受けた「記」というジャンルの作品よりもさらに中国古典文的であり、倭の要素を排除しようとする意向のきわめて強いものであった。この点、本研究をはじめ前にいっていた予想を裏切るものであった。むしろそこには、彼の中国古典文化への強い傾倒性をみることになった。

いわゆる「国風文化」の動向は、9世紀末、この宇多天皇によって強く推進され、ひろまっていくが、彼自身は実はそれと並行して、中国文化を相当先鋭的なかたちで実践していたことになる。こうした予想外の事実から、和・漢が先鋭的に対立するかのように並立した場所において、「国風文化」が形成されてくるらしいことが見通されることになった。

(5) 10~11世紀において、貴族たちが愛好する文化がどのような場・行事において享受されていたかを検討するため、平安時代を通じての内裏内の儀式行事運営構造についても検討を加えた。その結果、そうした行事を主導していたとされる蔵人所は、少なくとも9世紀段階においては、依然、内裏内の収納機関としての機能を第一とし、行事には大きく関わっていなかったこと、蔵人たちはあくまで天皇の「家人」として内々に活動していたこと、が明らかとなった。むしろ9世紀段階の殿上儀式行事は、近衛府や内蔵寮といった官司によって運営されており、あくまで令制の枠内で遂行されていた。

それに対し9世紀末以降に成立する行事においては、蔵人・殿上人が運営を担うようになる。ただし9世紀以前に成立していた儀式行事では、その後も令制の枠が守られたかたちで運営されており、一口に殿上儀式行事といっても、それらのなかには成立年代に即していくつかの類型のあることが明らかとなった。

(6) 以上の知見を確認するため、当時、中国海商が日本に舶来した「唐物」の実態を検討した。さらにここまでの知見を演繹的に理解するため、文学・絵画・仏像・書跡をはじめとする諸方面にも検討を加え、いかなる中国文化が当時の日本に影響を与えていたのかを総合的に考察した。その結論は以下の通り。

10~11世紀の天皇や貴族たちが愛好して

いた中国文化とは、実は同時代のものではなく、すでに滅んでいた唐代のものであった。たしかに同時代の「唐物」は多量に流入していたが、古い唐代の文化を愛好する彼らはこれを自分たちの文化のなかに深くは取り込もうとしなかった。そもそも「唐物」の実態は、種類の限られた消費財の類にすぎなかった。彼らはまた、これと並行して、9世紀末以降、倭の世俗のなかにも「文化」を発見するようになり、これも愛好するようになっていった。

すなわち国風文化とは、古い唐代文化への懐古と倭文化の発見という二つの柱をもつものであり、それらが並存・融合した性格のものであった。それは、昨今の議論に反し、やはり同時代の大陸に背を向けた、ある種閉ざされた環境下において形成・維持されたものであったと結論づけられる。

(7) 以上の(5)と(6)を総合することにより、次のような知見が得られた。当時の朝廷社会のなかでは、唐代の文化と倭の文化は愛好される場を基本的に異にしていた。唐を規範とする律令国家以来の伝統的な行事や場では唐代文化が、新たに生まれてきた、必ずしも唐を意識しない行事や場では倭の世俗文化が、それぞれ楽しまれていた。儀式行事や国家構造の変容と「国風文化」の形成・拡張は深く結びつき、連動したものであったことがみえてきたのである。今後、こうした国家構造と文化構造の連関性をさらに精緻に、かつ明瞭に解明していくことが求められることとなった。

(8) なお関連して、しばしば「国風文化」を代表するものとして語られる仏像様式の「定朝様」が、いかに国内で伝播するかを検証するため、ケーススタディとして、長野県飯田市にある光明寺の阿弥陀如来像の来歴について分析した。美術史専門家の協力を得て調査した結果、同像の制作年代は12世紀前半、制作者は中央のすぐれた仏師であると判明した。まさにこの時期、この地域は堀河天皇の御願寺の荘園となっており、光明寺はいわば、この荘園の中核となる施設に位置づけられていた。中央で流行していた様式の仏像が当地に安置されるようになった背景には、当該地域の荘園化という、中央との直接的な経済的結合があったことになる。現在、定朝様のすぐれた仏像のある土地は、多く中央権門の荘園があった場所とみられる。定朝様は中世荘園の形成にともない、全国に流布していったのではないか。その一般化のための証明は今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

佐藤全敏「蔵人所の成立と展開 家産官

僚制の拡張と日本古代国家の変容」、『歴史学研究』937、2015年、38-49頁、査読有

佐藤全敏「観心寺如意輪観音像 再考」、『美術研究』423、2014年、1-18頁、査読有

佐藤全敏「信濃国伊賀良荘光明寺と二つの経筒(下)」、『信濃』66-2、2014年、31-44頁、査読有

佐藤全敏「信濃国伊賀良荘光明寺と二つの経筒(上)」、『信濃』65-12、2013年、17-28頁、査読有

〔学会発表〕(計9件)

佐藤全敏「蔵人所の成立と展開 家産官僚制の拡張と日本古代国家の変容」、『2015年度歴史学研究会大会報告』、2015年5月24日、慶應義塾大学(東京都港区)

佐藤全敏「蔵人所の成立と展開 家産官僚制の拡張と日本古代国家の変容」、『歴史学研究会日本古代史部会例会』、2015年5月14日、明治大学(東京都千代田区)

佐藤全敏「蔵人所の展開」、『歴史学研究会古代史部会例会』、2015年4月25日、明治大学(東京都千代田区)

佐藤全敏「10・11世紀の在地社会を考える」シンポジウム 司会・コメント、日本史研究会古代史部会例会、2015年3月29日、池坊短期大学(京都府京都市)

佐藤全敏「9世紀における殿上儀式行事」、『歴史学研究会古代史部会例会』、2015年3月14日、明治大学(東京都千代田区)

佐藤全敏「蔵人所の成立」、『歴史学研究会日本古代史部会例会』、2015年2月21日、明治大学(東京都千代田区)

佐藤全敏「観心寺如意輪観音像 再考」、『独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所内研究会』、2013年12月6日、東京文化財研究所(東京都文京区)

佐藤全敏「宇多天皇の文体にみる倭と唐」、『歴史学研究会日本古代史部会』、2013年11月16日、國學院大学(東京都渋谷区)

佐藤全敏「観心寺如意輪観音像 再考」、『日本史研究会大会共同研究援助報告会』、2013年9月22日、京都市機関誌会館(京都府京都市)

〔図書〕(計2件)

佐藤全敏 ほか『日本古代交流史入門』

鈴木靖民編、共著、勉誠出版、2016年(印刷中)、頁未定(担当タイトル「国風とはなにか」)

佐藤全敏 ほか『日記・古記録の世界』
倉本一宏編、共著、思文閣出版、2014年、
771頁(うち担当 227-269頁、タイトル
「宇多天皇の文体」)

〔その他〕(計6件)

報道関連

佐藤全敏 NHK BSプレミアム「京都御所～秘められた千年の美～」考証・出演、2015年3月7日、NHK

佐藤全敏 NHKスペシャル「京都御所～秘められた千年の美～」考証・出演、2015年1月1日、NHK

講演関連

佐藤全敏「歴史と美術の間3 信濃国のある荘園と仏像」、社団法人金鷄会公開講座「古典を読む」、2014年7月26日、長野高校金鷄会館(長野県長野市)

佐藤全敏「古代末期の光明寺と伊賀良荘」、飯田市光明寺調査報告会、2014年6月1日、同寺庫裏(長野県飯田市)

佐藤全敏「光明寺阿弥陀如来像調査の経緯」、飯田市光明寺調査報告会、2014年6月1日、同寺庫裏(長野県飯田市)

佐藤全敏「歴史と美術の間2 橘嘉智子と法華寺十一面観音像」、社団法人金鷄会公開講座「古典を読む」、2013年7月27日、長野高校金鷄会館(長野県長野市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 全敏 (SATO, M asatoshi)
信州大学・学術研究院人文科学系・准教授
研究者番号: 20313182